

共産主義インタナショナル第三回大会

1921年6月22日－7月12日

〈総攻勢が近ければ近いほど〉

13-7も同文

五 ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァ  
キア、ハンガリーおよびイタリアの代  
表団員の会議における演説

七月十一日

—  
きのうの『プラウダ』で私が読んだ若干の報道は、攻勢の時機が大会でわれわれが予想したよりも近いかもしれないということを、私に納得させた。若い同志たちはそのことでわれわれにずいぶん激しくくってかかったのだが。

しかし、これらの報道についてはあとで述べることにして、すぐこの場で言うべきでないのは、総攻勢が近ければ近いほど、われわれは「いっそう日和見主義的に」行動しなければならないということである。いま諸君はみな国に帰り、第三回大会以前にくらべてわれわれは考えぶかくなった、と労働者にむかって言うことであろう。諸君はきまり悪がってはならない。諸君はこう言うべきである。われわれは誤りをおかしたが、今後はもっと慎重に行動しようと思う、と。そうすれば、われわれは大衆を、社会民主党や独立社会民主党から自分の側にひきつけることができよう。これらの大衆は、客観的には事態の全経過によってわれわれのほうに押しやられているのだが、われわれを恐れているのである。私は、もっと慎重に行動する必要があることを、わが国の実例で示してみたいと思う。

戦争の当初、われわれボリシェヴィキはただ一つのスローガンを固持していた。——内乱、しかも無慈悲な内乱、というのがそれである。われわれは、内乱に賛成しない者はだれでも、裏切者だとして糾弾した。しかし、1917年3月にロシアに帰ったとき、われわれはこの立場をすっかり変えた。ロシアに帰って、農民や労働者と話し合ったとき、われわれは、彼らがみな祖国の擁護に賛成していること、ただし、いうまでもないことながら、メンシェヴィキとはまったく違った意味で賛成なのだということを悟った。これらの普通の労働者や農民を、ならずものだの、裏切者だのと呼ぶことはわれわれにはできなかった。われわれは、これを「善意の祖国防衛主義」と規定した。総じてこの問題について、私は大きな論文を書き、いっさいの資料を公刊したいと思っている。4月7日に私はテーゼを印刷に付した。テーゼのなかで私は、慎重と忍耐を説いた〔本全集、第24巻、3－9ページ〕。戦争の当初にわれわれがとったはじめの立場は、正しかった。そのころには、明確な、断固たる中核をつくりだすことが重要だったからである。その後、われわれがとった立場も、やはり正しかった。それは、大衆を獲得する必要があることから出発したものであった。すでにその当時には、われわれは、臨時政府をただちに倒すという考えに反対した。私はこう書いた。「臨時政府は倒さなければならない。なぜなら、それは人民的な政府ではなく、寡頭支配的な政府だからであり、われわれに、パンも、平和も、あたえることができないからである。しかし、この政府をただちに倒すことはできない。なぜなら、

それは、労働者ソヴェトに基礎をおいており、いまのところまだ労働者の信頼を得ているからである。われわれは、ブランキ主義者ではなく、労働者階級の多数者に反対して、その少数者にたよって統治するつもりはない」〔同右、23 - 24 ページ〕。老練な政治家であるカデットは、われわれの以前の立場と新しい立場の相違にすぐに気がついて、われわれを偽善者と呼んだ。しかし、その一方で彼らはわれわれのことを、スパイ、売国奴、ならずもの、ドイツの手先などと呼んでいたので、はじめの呼び名はなんの印象もあたえなかった。4月20日に最初の危機がおこった。ダーダネルス海峡についてのミリュコフの覚え書は、この政府が帝国主義政府であることを暴露した。それにつづいて、武装した兵士大衆が政府官署の建物めがけて進撃し、ミリュコフを倒した。兵士の先頭に立ったのは、無党派のリンデ某であった。この運動は、党が組織したものではなかった。当時われわれはこの運動をこう特徴づけた。これは武装デモンストレーションよりはいくらか大きく、武装蜂起よりはいくらか小さいものである、と。4月22日のわが党の会議で、左派は政府の即時打倒を要求した。中央委員会は、これに反して、内乱のスローガンに反対を表明した。われわれは地方の扇動家の全員に、ボリシェヴィキが内乱をのぞんでいるという恥しらずの嘘を反駁するようにという指示をあたえた。4月22日に私はこう書いた。「臨時政府を倒せ」というスローガンは正しくない、なぜなら、人民の多数者を味方にもたなければ、このスローガンは空文句か、でなければ冒険になってしまうからである、と〔同右、207-208ページ〕。

われわれは、自分の敵の面前で、わが党の左派を「冒険主義者」と呼ぶことをはばからなかった。メンシェヴィキは、このことで凱歌をあげ、われわれの破産をうんぬんした。しかし、われわれはこう言った。中央委員会よりもほんのすこし——ほんのわずかでも——左に寄った立場をとろうとする試みはすべて愚行である、中央委員会よりも左に寄った立場をとるものは、すでに普通の良識を失った人間である、と。敵がわれわれの失策をよるこぶからといって、われわれはそんなことにおびえはしなかった。

今日のわれわれのただ一つの戦略は、もっと強力になるということであり、したがって、もっと賢明に、もっと考えぶかく、「いっそう日和見主義的に」なることである。そして、このことを、われわれは大衆にむかって明言しなければならない。だが、考えぶかくふるまったおかげで大衆を獲得したあとで、われわれは、つぎに攻勢戦術を、しかももっとも厳密な意味での攻勢戦術を適用するであろう。

つぎに三つの報道について。

(一) ベルリンの市営企業労働者のストライキ。市営企業労働者の大部分は保守的な人間で、多数派の社会民主党や独立社会民主党に所属しており、生活も十分に保障されているのだが、その彼らが、いまストライキをやることを余儀なくされているのである。

(二) リールの繊維労働者のストライキ。

(三) 三番目の事実はいちばん重要である。ローマで、ファシスト反対闘争を組織するための大衆集会で（が——青山）ひらかれ、五万人の労働者——共産主義者、社会主義者、さらに共和主義者など、すべての党に属する者——がそれに参加した。集会には軍服を着た大戦参加者 5000 人が出席したし、ファシストはだれひとり街頭に姿をみせようとはあえてしなかった。このことは、ヨーロッパには、われわれが考えていたよりも大量の可燃性物質があることを証明している。ラッザリがわれわれの戦術にかんする決議をほめ

た。これは、われわれの大会の大きな成果である。ラッザリがこの決議を承認すれば、ラッザリのうしろについている数千人の労働者がきっとわれわれのところにやってくるであろうし、彼らの指導者たちも、労働者をおどしつけて、われわれから遠ざけておくことはできないであろう。《Il faut reculer, pour mieux sauter》(いっそうよく跳ぶには、うしろへ下がらなければならない)。そして、この跳躍は避けられない。情勢が客観的に耐えられないものとなりつつあるからである。

こうしてわれわれは、われわれの新しい戦術を適用しはじめている。いらだつにはおよばない。われわれは遅れる気づかいはないし、むしろ、早まってはじめるおそれがあるのである。もし、ロシアはそんなに長いあいだもちこたえることができるのか、と諸君がたずねるなら、われわれはこう答える。われわれはいま小ブルジョアジーとの、農民との戦争、経済戦争をやっているが、われわれにとっては、この戦争のほうが、過ぎ去った戦争よりもずっと危険なのだ、と。だが、クラウゼヴィッツが言っているように、危険は戦争の本領であって、われわれは一瞬間といえども危険の埒外らちがわに立ったことはないのである。われわれがもっと慎重に行動すれば、われわれが適時に譲歩すれば、たとえこの戦争が三年以上つづくとしてさえ、この戦争でもわれわれはやはり勝利するであろうと、私は確信している。

要約しよう。

(一) われわれは新しい戦術を適用しようとしており、この方法で大衆を獲得するであろうと、全ヨーロッパでわれわれはみな一致して言明するであろう。

(二) 主要な諸国——ドイツ、チェコスロヴァキア、イタリア——における攻勢を互いに調整すること。この点では準備が、たえまない相互作用が、必要である。ヨーロッパは革命をはらんでいるが、革命の日程をあらかじめ作成することはできない。ロシアにいるわれわれは、五年どころか、それ以上でももちこたえるであろう。唯一の正しい戦略は、われわれが採用した戦略である。われわれは、協商国が対抗するすべのないような地歩を、革命のために獲得するであろうと、私は確信している。そして、これは世界的規模での勝利の端緒となるであろう。

## 二

シュメラルは私の演説に満足したようであった。しかし、彼はこれを一面的に解釈している。委員会で私はこう言った。正しい方針を見いだすには、シュメラルは左へ三歩、クレイビハは一步右へすすまなければならない、と。残念なことに、シュメラルは、彼がこの数歩を踏みだすことについて、なにも言わなかった。また、彼が事態をどう考えているかについても、なにも言わなかった。さまざまな困難について、シュメラルは、聞き古した話をくり返すだけで、新しいことはなにも言わなかった。シュメラルは言った。私が彼の不安の念を吹きはらった。この春には、共産党の指導部が彼に時宜に適しない行動を要求するのではないかと、彼は懸念していたが、諸事件がこの懸念を吹きはらった、と。しかし、いまわれわれが不安に思っているのは、これとは違ったことである。すなわち、チェコスロヴァキアでも事態は実際に攻勢を準備するところまですすむであろうか、それとも、困難についての単なるおしゃべりにとどまるであろうか、ということである。左翼的な誤りは単なる誤りである。それは大きな誤りではなく、容易に是正することができる。

ところが、誤りが行動の決意にかんするものであるばあいには、それはけっして些末な誤りではなく、裏切りである。この二つの誤りを同日に論じることにはできない。われわれは革命をおこなうであろうが、しかし他の人々が行動に立ったあとではじめてそれをおこなう、という理論は、根本的にまちがっている。

### 三

私の考えでは、本大会でなされた後退を、1917年のロシアでわれわれがとった行動と比較し、そうすることでこの後退が攻勢の準備となるべきものだという事を、示さなければならぬ。敵は言うであろう、きょうわれわれが言っていることは、以前に言っていたことと違っている、と。彼らは、そうしてもたいした利益は得られないであろうが、われわれが労働者大衆にむかって、三月行動はどのような意味で成功とみなすことができるか、なぜわれわれはこの行動の誤りを批判するのかを語り、今後はわれわれはもっとよく準備しなければならないと語るならば、彼らはわれわれの言葉を理解するであろう。テラチーニは、シュメラルとブリアンの解釈はまちがっている、と言っているが、私は彼と同意見である。調整ということをもっと豊かで、もっと人口の多い他の国が行動するまで、われわれは待たなければならないという意味に解するならば、それは共産主義的な解釈ではなく、あからさまな欺瞞である。調整は、どういう契機が重要かということ、他の諸国の同志たちが知る点になければならぬ。調整のもっとも重要な解釈はこうである。すなわち、すぐれた模範をもっとうまく、もっと速やかにまねるということである。ローマの労働者の模範はすぐれたものである。

第42巻『共産主義インタナショナル第3回大会』P434～440

1921年7月11日

1958年に、最初の演説は全文、第二と第三の演説は簡略な速記録によって、雑誌『ソ連邦共産党史の諸問題』第五号にはじめて発表

速記録によって印刷 原文はドイツ語